

# 論 文 要 旨

申請者氏名 鈴木今日子

申請学位 博士(言語教育学)

主論文題目 認知言語学的アプローチによる接続形式テの中核的意味

## 第1章 序論

本論の目的は、接続形式テの中核的意味を抽出するとともに、テ形接続文の意味内容の推測がどのようになされるのかを明らかにすることである。

接続形式「テ」は接続の意味関係を表わさない。従来、テ形接続の表わす接続の意味関係については多くの研究がなされ、テ形接続は複数の接続の意味関係を表わすとされている。しかし、それら複数の意味関係の根底にある接続形式テの中核的意味や、テ形接続文の受信者が、その意味内容をどのように推測しているかは、注目されてこなかった。本論では、従来の統語論的な知見に語用論や認知言語学の考え方を加え、複合的にテ形接続文を捉える。また、それらがテ形接続文の表現効果にどう反映しているかについても考察する。

そして、日本語教育の立場から、学習者がテ形接続文を受信・発信する際の課題も明らかにし、テ形接続文の効果的な指導方法を提案する。

## 第2章 統語論からみた接続形式テ

従来の統語論における接続形式テの先行研究の結果を整理した。接続形式テは、文において従属節を形成するという構文的な機能を持つ。また、接続形式テそのものは接続の意味関係は表わさず、接続の意味関係は、前後節の語彙の意味や文脈によって決まる。

テ形接続の意味関係は、前後節の修飾関係、時間関係、意味関係の3つの観点から総合的に判断される。テ形接続の表わす意味関係は、基本的には「並列」、「継起」、「因果」、「付帯(様態)」の4つに集約できる。そして、この4つの接続の意味関係は連続し、互いに意味関係を包括している。

また、テ形接続文は、前後節を貫く統一テーマを有している。テ形接続の意味関係は、この統一テーマの下、修飾関係、時間関係、意味関係の3つの観点から総合的に判断される。

## 第3章 認知言語学的アプローチによるテ形接続文の中核的な意味の捉え方

認知言語学の「図と地」という事象の捉え方から、テ形接続文のテ節の事象は強く背景化され、その上に後続節の事象が図として重なり、全体として1つのまとまりのある像を形成することを明らかにした。

また、接続形式テの中核的意味とは、発信者の認識を表わすことであり、受信者は発信者の認識のプロセスをたどり、受信者の情報、知識、経験、文化的背景などを手がかりに、テ形接続文の意味内容を再構築することも明らかにした。

## 第4章 小説におけるテ形接続文の表現効果

テ形接続文にはどのような表現効果があるか、小説の中の使用例から、その表現効果を分析・考察した。その結果、小説の世界や人物のイメージ形成や、登場人物の認識のプロセスの表現にテ形接続文が効果を発揮していることがわかった。

また、それらの表現効果は、第3章で明らかにした接続形式テの中核的意味や、受信者のテ形接続文の意味内容の捉え方によってもたらされる効果であることも明らかにした。

## 第5章 中国語母語話者のテ形接続文の意味推測

中国語を母語とする日本語学習者がテ形接続文の意味内容をどのように推測しているか、語用論的見地から、学習者のテ形接続文の中国語翻訳文を分析・考察した。

調査の結果、中国語母語話者は、テ形接続文の意味内容推測を積極的にする者と意味を特定しない者がいることが観察できた。

中国語にはテ形接続文と類似した文の並列表現がある。中国語の文の並列表現は、テ形接続文と同じく、並列された文と文の間の意味関係は表わさない。よって、テ形接続文を中国語の文の並列表現に置き換えて翻訳した者は、テ形接続文の意味内容を特定化せず、包括的な意味そのままに受け取っていると思われる。

一方、中国語に類似表現があるにもかかわらず、意味を明示する語句を入れて翻訳した者は、テ形接続文の意味内容を特定し、積極的に意味内容の推測を行ったと考えられる。しかし、その場合は、意味内容を特定化することによって、本来テ形接続文が包括的に持つ複数の意味関係を捨象してしまうことも明らかになった。

## 第6章 中国語母語話者のテ形接続文の使用と認識

中国語母語話者のテ形接続文の発信者としての課題を、学習者のテ形接続文の産出文から分析・考察した。

テ形接続文の類似表現である中国語の文の並列表現は、テ形接続よりも表わせる接続の意味関係の範囲が広く、テ形接続が表せる「並列」、「継起」、「因果」、「付帯(様態)」に加え、「仮定(未確定条件)」も表わすことができる。そのため、中国語母語話者が「仮定」の意味関係をテ形接続文によって表わそうとすると、日本語母語話者の受信者はその意味関係を推測できないために「誤用」と判断することがわかった。

また、中国語の文の並列は、独立可能な文を接続するのに対し、テ形接続文はテ節で接続する。中国語で文を並べる感覚で同じようにテ節を複数回並べると、従属節であるテ節がどこにかかるのか、主節と従属節の関係が読み取りにくくなる場合がある。その場合も、日本語母語話者の受信者は接続の意味関係の推測が困難となり、「誤用」と判断することも明らかにした。

## 第7章 テ形接続文の中核的意味を取り入れた指導の提案

本論で明らかにした接続形式テの中核的意味や、テ形接続文の意味内容の捉え方を取り入れた日本語学習者への指導を提案した。

まず、接続形式テは接続の意味関係を包括的に表わすということを認識することが重要である。テ形接続文の意味内容は1つに特定できるものではなく、それこそがテ形接続文の本質である。

次に、テ形接続文の意味内容の推測は受信者に委ねられるということを理解する必要がある。発信者の発信意図と受信者が推測した意味内容は必ずしも一致するものではなく、ずれが生じることがある。発信者は受信者が意味内容を推測しやすいように手がかりを十分に提供する必要がある。また、受信者が意味内容を推測できない場合は、なぜできないのか、その原因を認識することが重要である。

最後に、テ形接続文の表現効果を知ることも重要である。接続の意味関係を特定しないという本質的な特徴や、テ節の事象の背景化によってもたらされる表現効果を知り、効果的な発信を目指すべきである。

以上、従来のテ形接続文の指導に、認知言語学や語用論の視点を取り入れた指導を提案した。

## 第8章 結語

本論では、テ形接続文を、従来の統語論的な視点に、認知言語学や語用論の視点を新たに加え、複合的に捉えることを試みた。

まず、従来の統語論の研究結果を整理した。接続形式テは文中において従属節を形成するという構文的機能を持つ。接続形式テ自身は接続の意味関係は表わさず、接続の意味関係は、修飾関係、時間関係、意味関係から総合的に判断される。テ形接続は基本的に「継起」、「因果」、「並列」、「付帯(様態)」の意味関係を表わすが、それらは連続しており、包括的に接続の意味関係を表わす。

語用論の視点から、テ形接続文を1つの談話とみなし、テ形接続文は発信者の意図伝達と受信者の意味内容の推測という双方のやりとりの上に成り立つことを確認した。接続形式テそのものは接続の意味関係を表わさないため、発信者は受信者がテ形接続文の意味内容を推測しやすいように十分な手がかりを提供する必要がある。一方、受信者は、語彙、文脈、知識、情報、経験、文化的背景などを手がかりに、テ形接続文の意味内容を推測する。ただし、発信者の発信意図と受信者の意味内容の推測の結果は必ずしも一致するとは限らない。前後節の事象間の関連づけの範囲が発信者の母語と日本語が異なる場合は、受信者の意味内容の推測が困難になることもある。

認知言語学の「図と地」という事象の捉え方から、接続形式テの中核的意味を抽出した。接続形式の中核的意味とは、発話者の認識を表わすことである。テ形接続文の受信者は発話者の認識

のプロセスをたどり、テ形接続文の意味内容を推測し再構築する。また、テ節の事象は強く背景化され、その上に後続節の事象が重なって、1つのまとまった像を作ることも明らかにした。

そして、これら統語論、語用論、認知言語学の複合的な視点を取り入れたテ形接続文の指導方法を提案した。この複合的な視点は、今後、日本語教育において、学習者への指導に有効であると考えられる。

以上、本論では統語論、語用論、認知言語学からテ形接続文を複合的に捉えた。そして、これらの視点はテ形接続文を捉えるのにそれぞれ不可欠な要素であることも明らかにできた。

(以上)